長崎県文化財調査報告書　第149集

馬乗石遺跡

1998

長崎県教育委員会

序　　文

対馬南端の豆酘の地は、国指定の天然記念物である龍良山原始林の南に開けた谷あいの集落で、民俗資料の宝庫として珍重される対馬の中でも特に古い慣習が残っているところであります。旧暦の正月三日には、雷神社で、無形民俗文化財（国選択）である亀卜習俗が行われている他、いろいろな珍しい習俗が残っています。このような古い習俗が残ったのも地形的に隔絶し独自の境域を形成してきたためと考えられています。

長崎県教育委員会は、今回この地に農道新設の計画があり、対馬支庁農林水産部耕地課と協議を重ねた結果、発掘調査を実施することにいたしました。

この報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護の精神を深め、学術、教育、文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

発掘調査の実施にあたって御理解と御協力をいただきました地元の関係の皆様と、作業に従事して下さいました皆様に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成10年3月

長崎県教育委員会教育長

中　川　　忠

例　　言

1.　本書は、下県郡厳原町豆酘に所在する馬乗石遺跡の緊急発掘調査報告書である。調査は平成９年９月２９日から１０月１７日まで行い、調査面積は４６㎡である。

2．調査関係者は以下のとおりである（平成９年度）。

調査指導	対馬文化財協会	会長	永留　久恵
調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	村川　逸朗
	同	〃	宇土　靖之
	同	文化財調査員	荒木　伸也
	厳原町教育委員会生涯学習課	文化財係長	小磯　嘉文
	同	主査	宮川　明哲
調査協力	対馬支庁耕地課	技師	高谷　正治

3．本書は分担執筆した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ章を村川が、Ⅳ章を宇土が執筆した。遺物実測は、宇土、荒木、森崎京子、遺物トレースは、渡辺洋子、斉藤いづみ、近藤千鶴、遺物の写真撮影は大平由里子による。編集は村川、宇土が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1
Ⅱ　地理的歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調　　査
　1．調査概要 …… 4
　2．土　　層 …… 4
　3．遺　　構 …… 4
Ⅳ　出土遺物 …… 7
Ⅴ　ま と め …… 16

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置及び地名表 …… 2
第2図　馬乗石遺跡及び周辺地形 …… 3
第3図　馬乗石遺跡トレンチ及び発掘区 …… 5
第4図　土 層 図 …… 6
第5図　出土遺物① …… 8
第6図　出土遺物② …… 10
第7図　出土遺物③ …… 12
第8図　出土遺物④ …… 14
第9図　出土遺物⑤ …… 15

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景及び発掘前の様子 …… 19
図版2　調査状況 …… 20
図版3　出土遺物① …… 21
図版4　出土遺物② …… 22
図版5　出土遺物③ …… 23

Ⅰ　調査にいたる経緯

平成７年度の新規採択事業として、下県郡厳原町豆酘で農道の整備事業が計画された。豆酘は亀卜習俗や樫ぼの等の貴重な民俗資料が残存し、歴史的にも古墳等の存在が知られた所なので、事前に工事予定地の分布調査を行った。その結果、谷底部分の神田川の西側で、古墳らしき土盛りとその周辺で須恵器や高麗青磁等を表面採集し調査の必要性を確認するところとなった。調査の結果、古墳ではなく、祭祀遺構ではないかと判断された。

Ⅱ　地理的歴史的環境

豆酘の地は、北に対馬第二の高山、国指定天然記念物である龍良山原始林を有する、標高559ｍの龍良山が聳え、南は対馬海峡、はるか先には壱岐・松浦地方を望む。東に神崎、西に豆酘崎が断崖を形成し、広く浅く形成された港湾は南風に弱く台風の時は船を陸に引き上げる。この海域は、龍良山からのミネラルを含んだ森の栄養分が海に流れ出し対馬有数の好漁場となっている。この港湾には、神田川と乱川の二つの川が注いでいる。神田川の流域は神域として昔は人が住まなかった地域で、乱川のほとりが集落となった。北と西はそれぞれ龍良山から南と西に走った峰によって遮られた形になっており他の村とあまり交流せずに対馬の中でも独自の境域を形成していた。

この地の歴史並びに民俗関係は、永留久恵氏の「田植えに関する習俗」等に詳しい。それによれば、古伝に、「神功皇后三韓を征する時、豆酘の行宮に入り玉う」。また、「皇后凱旋の途次、雷大臣命を本州の主となし玉う。大臣豆酘に居り、その子孫対馬の直となる」『対馬記事』（平山東山）・『対馬島誌』（日野清三郎編）等がこれを史伝として伝えている。永留氏は、これを神話・伝説の領域で、そのまま歴史事実と見ることはできない。ただ考えられることは、四世紀から七世紀にかけて何度も朝鮮に兵を出しておりその軍船が豆酘の浦に寄航したであろう。と述べ、また、豆酘と阿連に雷神社があり、この両社には、古来亀卜の秘法があり、阿連の橘、豆酘の岩佐両家がこれを伝えているとの事である。

『日本書紀』に顕宗天皇の三年磐余の田十四町を、対馬下県直のまつる高皇産霊神に献った。豆酘の高御魂神社をこれに当てることに諸説が一致していて、磐余の田は、神田川流域の田地であろうと述べられている。

後一条天皇の寛弘五年（１００８）、対馬権禄阿比留宿弥良家が巨鐘を豆酘寺に奉った。昭和３２年には、豆酘中学校の敷地を開くときに数基の箱式石棺が発掘されたと述べられている。また、保床山の中腹には、昭和２３年に東亜考古学会によって調査された対馬で有数の古墳である保床山古墳がある。このほかにも五世紀から八世紀頃にかけて、少しづつ年代の違う古墳が破壊されたあとがあるとも述べられている。

豆酘は古神道の盛んな里で、式内社が四社ある。観音様・天道様・弘法様の信仰が、対馬の三大宗教で、豆酘がこれらの信仰の中心地となっていたといわれている。

第1図　遺跡位置及び地名表

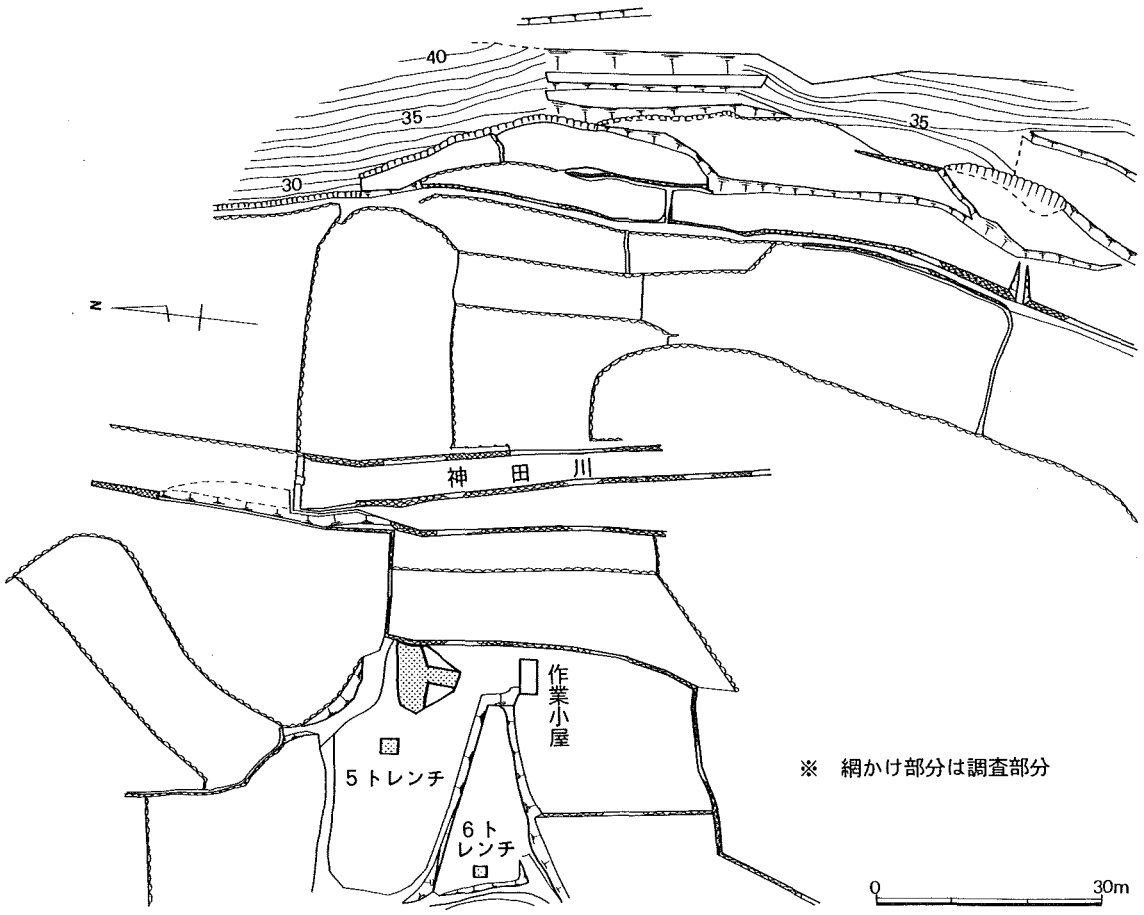
地図No.	出土村No.	名称	所在地	種別	立地	時代	備考
14	1	豆殿保床山古墳	殿原町豆殿字床保山	古墳	丘陵	古墳	
74	29	オテヅカタ遺跡	〃 〃 字テヅカタ	遺物包蔵地	〃	古・弥	
	2		〃 〃 〃			古	
	3	保床山遺跡C	〃 〃 〃	〃	〃	古	
	30						
	31						
	37	多久頃塚神社遺跡	〃 〃 字寺門	墳墓	〃	中	横穴5面
	4		〃 〃 字米神田	〃	〃	中	石棺数基
	5	豆殿中学校遺跡	〃 〃 字米神田	〃	〃	古・弥・古	
	32						
	6	殿塚遺跡	〃 〃 字米神田	遺物包蔵地	〃	縄・弥・古	
	33						
	7	豆殿内院遺跡	〃 〃 豆殿内院	〃	〃	弥・古	
	35						
	8	豆殿内院九輪塔群	〃 〃 字仁家	石造物	〃	中・近	五輪塔数10基、宝篋印塔1基
	36						
	9	与良内院遺跡	〃 〃 与良内院	遺物包蔵地	〃	弥・古	
	34						
	10	久和遺跡	〃 〃 久和	〃	〃	弥・生	
	28						
	11	安神遺跡	〃 〃 安神	〃	砂丘	縄・弥	
	27						
	12	鷹巣石遺跡	〃 〃 豆殿字鷹巣石	遺物包蔵地	谷底	古～近世	

後嵯峨天皇の寛元四年（１２４６）、宗弥次郎左衛門尉重尚が、太宰府の命により阿比留平太郎国時を討とうとして豆酘に上陸した。豆酘の別当阿比留長範は、これを討とうとして敗死した。鶏知で平太郎も滅ぼされた。

後小松天皇の応永九年（１４０２）、宗頼重（宗氏六代）は、一族の反に遭い筑前にのがれた。そののち長子貞茂が、筑前の兵を率いて豆酘に上陸した。

後花園天皇庚正元年（１４５５）、豆酘郡主宗茂世（宗氏の分家）、朝鮮と歳遣船三艘を約したといわれている。

〈引用参考文献〉
永留久恵　１９７０　Ⅱ長崎県の田植え習俗　対馬『田植えに関する習俗５高知県・長崎県・鹿児島県』無形の民俗資料記録第１２集　文化庁文化財保護部



第２図　馬乗石遺跡及び周辺地形

Ⅲ 調　　査

1．調査概要

遺跡は、神田川によって開析された谷底の神田川左岸に立地している。近くに、近世の馬が使用されていた時に豆酘の集落に入るときには、この場所より先は神域として馬を降り、この場所で馬の乗り降りを行い、乗り降りのための立石が、遺跡の北側100m程の地に１基残存している。また、本遺跡の南西50m程の位置にも、かつてはあったと言われているが現存しない。

発掘調査は、当該の遺構が約1.2m程の盛土をもち、高いところから見た平面形は略前方後円墳の形をしており、古墳の可能性もあったことから、まず、石室の有無を確認するため、幅１mのトレンチを、東西南北に十文字にいれた。それぞれ1.6m程掘り下げたが、石室は確認できず、古墳でないと判明した。

トレンチ断面に見る土層の状況は、１層である表土の下は、２層が灰黄色土層、３層が礫層となっている。その下は赤褐色粘質土層となっている。

遺物の出土状況は、２層下部から須恵器が出土したため、プライマリーな層が残存するのかと思われたが、その下の礫層内から中世の輸入陶磁器が出土するなど、中世以降の堆積が考えられる。

古墳ではないし、中世以降の堆積による盛土とすると、遺跡の性格が問題となるので、まわりに中世以降の生活跡でもあるのではないかと、３m×３m（５トレンチ）と、２m×２m（６トレンチ）の調査壙を設定して様子をみたが、生活の痕跡は認められなかった。ただ、６トレンチの近くで近世陶磁器や、炭化物が、畑の耕作中に出土したとの話があり、近世の時期に何らかの人の手が入った可能性はある。発掘による出土遺物は、５世紀の陶質土器から古墳時代の須恵器、古代から中世の輸入陶磁器等も出土することから、それぞれの時期の遺跡ではあったのだろう。

道路計画に係る範囲で、盛土部分については完掘した。

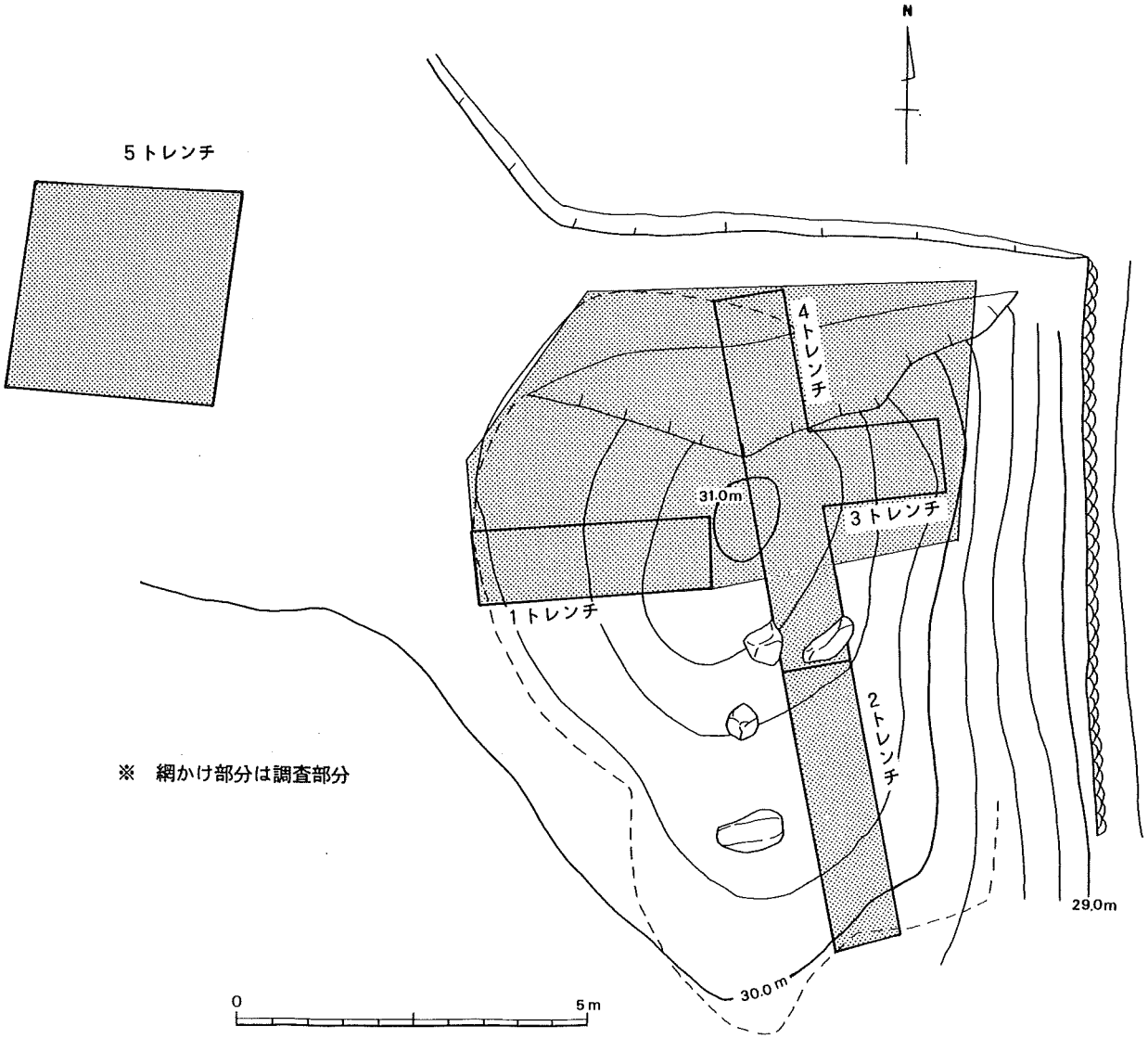
2．土　　層

この盛土部分は、隣接する畑の表面から1.2m程の高まりがあり、高いところから見た平面形は略前方後円墳形をしているが、発掘トレンチに見る断面は、１層の表土に礫を多く含み、２層は灰黄色土層、３層は灰色礫層、４層は赤褐色土層である。４層は地山だと思われるので、その上に礫層があり、灰黄色土層を挟んでその上にまた礫を多く含む表土がのっているという堆積状況になる。

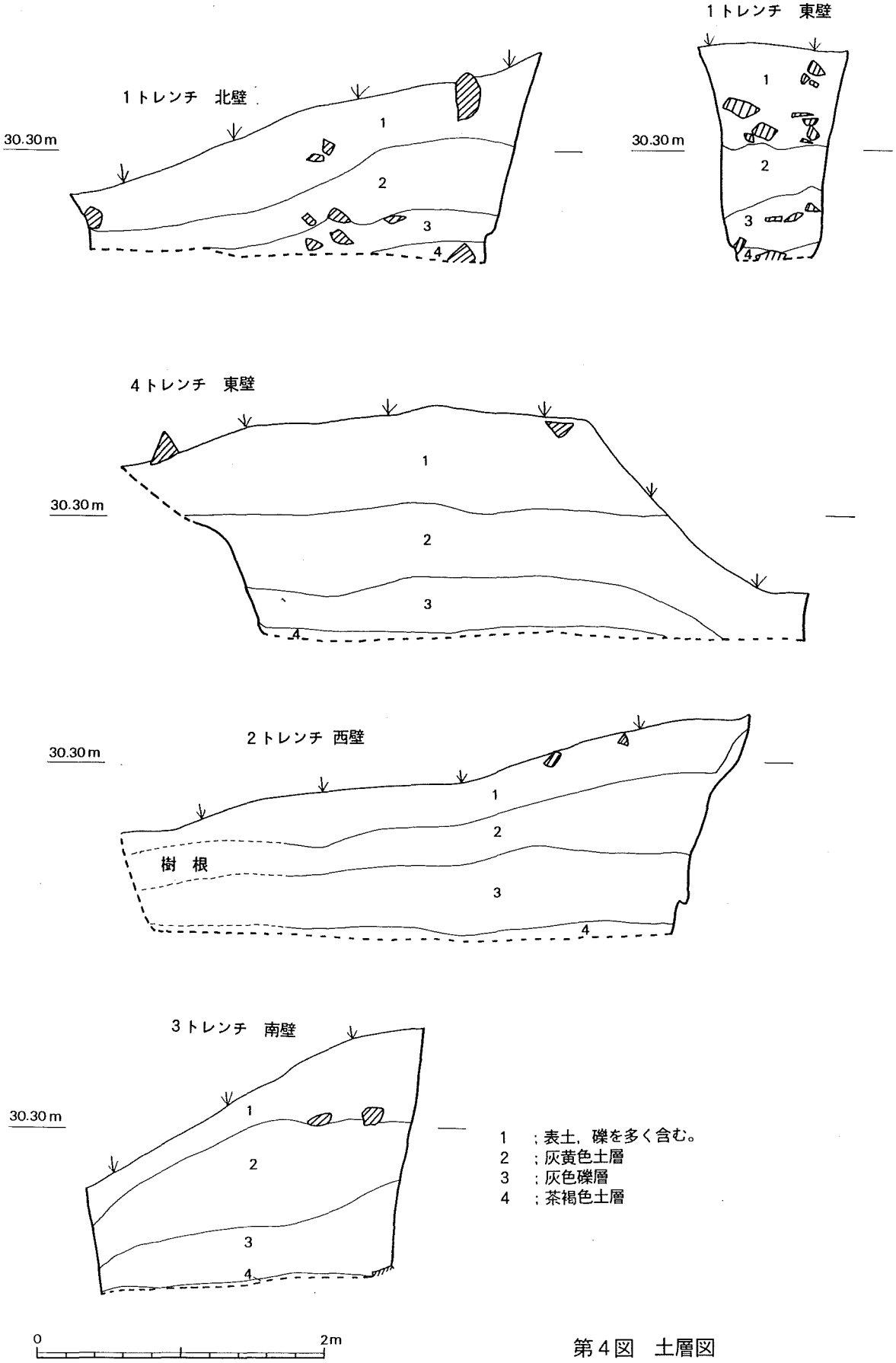
3．遺　　構

略前方後円墳形をした盛土部分の上にやや大きめの石が４個ほどのっていた。調査の進行過程で、調査概要の所で述べたように、最初は、２層の灰黄色土層の中から須恵器が出土し、古墳の可能性を期待したが、結局、３層の灰色礫層の中から中世の輸入陶磁器等が出土したので、中世以降に、礫を積み上げ、その上に灰黄色土層の堆積があり、またその上に礫を多く含む表土がのっているという形

をとっている。次に考えたのは、まわりに古墳から古代、中世の生活遺構があり、何らかの人為的な造成作業か何かでこの場所に土が寄せられて盛土遺構ができたのだろうかと、5、6トレンチと入れてみたが、ピット等の遺構・遺物等の出土は見られなかった。



第3図　馬乗石遺跡トレンチ及び発掘区


1トレンチ　北壁
30.30m
1
2
3
4
1トレンチ　東壁
30.30m
1
2
3
4
4トレンチ　東壁
30.30m
1
2
3
4
2トレンチ　西壁
30.30m
1
2
樹　根
3
4
3トレンチ　南壁
30.30m
1
2
3
4
1　；表土，礫を多く含む。
2　；灰黄色土層
3　；灰色礫層
4　；茶褐色土層
0
2m

第4図　土層図

Ⅳ　出土遺物

土師器（第５図１～５・７・８）

１は小型の甕の口縁部である。口縁部を外反させやや丸みを持つ胴部となる。外面に櫛目調整，内面はナデ調整。胎土は灰黄色を呈す。２は埦高台部で全体的に薄く仕上げられている。高台はラッパ状に外反し，高台内には乾燥時の板目跡が残る。胎土は白橙色で多量の石英粒を含む。３は黒色土器Ａの埦底部で高台は剥がれたと思われる。胎土は淡い黄橙色。４は埦底部片。畳付部で外反する。胎土は精選された白黄色。５は黒色土器Ｂの埦底部。器壁は厚め。７・８は回転台土師器蓋。胎土は黄橙色。７は身受のかえりが付き，口縁端部を内側に折る。　２～５は２層から。

緑釉陶器（第５図６，第７図41・46）

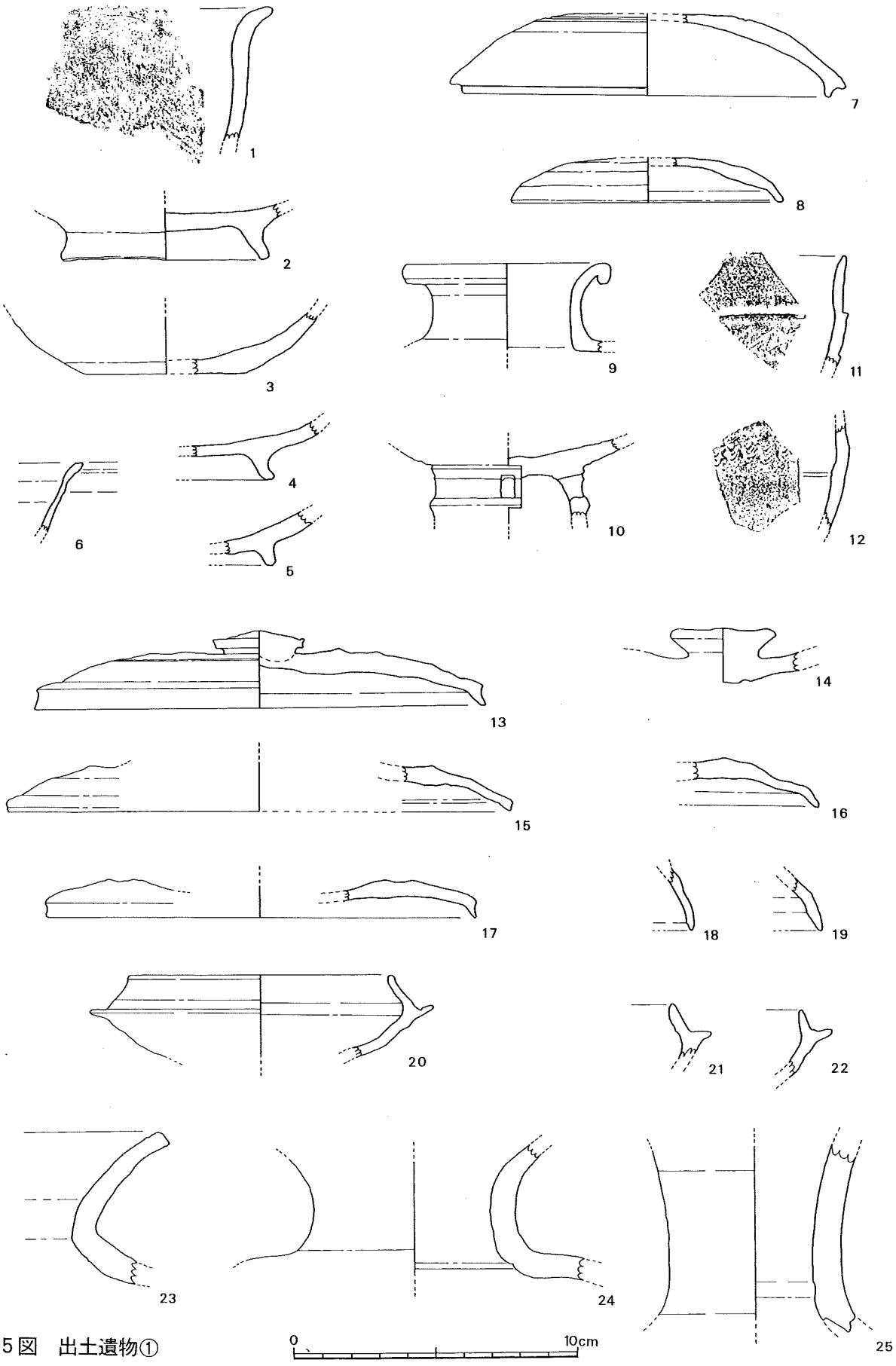
６・41・46は緑釉陶器。６は口縁部で外反し，器壁は薄い。内外面ヘラ調整。全面に施釉される。胎土は明褐色で軟質。41は圏線のある蛇の目高台を持ち，体部は直線的に立ち上がる。全面に施釉され，胎土は暗灰色で硬質。高橋分類のＣ類，編年的にはⅡ期であろう，46は内面見込みに沈線状の段を持ち，高台内面外周部にヘラ削りの段を持つ。高台畳付と高台内は無釉。胎土は灰白色で硬質堅緻である。高橋編年のⅢ期であろう。６は２層から，46は４層から出土。

陶質土器（第５図９～12）

９は短頸壷口縁部で口頸部は外反し，口縁部は折り返して丸く納めている。胎土は紫灰色。10は高坏脚部。内面見込みと高台内の中心は削り残し盛り上がる。透かしは二方か。胎土は紫灰色。9･10は新羅系か。11･12は櫛描波状文を持つ。11は口縁部。胴部は丸みをおび口縁部で外反する。外面は灰色，内面は灰黄色。胎土は灰色。12は胴部。紫灰色の胎土を呈する。９は４層から,10・11は２層から出土。

須恵器（第５図13～25，第６図26～33）

13～19は坏蓋。13は扁平な擬宝珠形のつまみを有し，口縁端部外面を凹ませる。14は中央が僅かに突起する擬宝珠形を持つ。15･16は天井部と体部の境が明瞭で，口縁端部を嘴状に折り曲げる。17は口縁端部を垂直に折り曲げる。13･15～17の内面は口縁部から体部と天井部の境まで回転ヘラ削り調整が施される。18･19は口縁部がほぼ垂直に落ち込む。20～22は坏身。20･22は受部よりも長くやや外反気味の立ち上がりを持つ。21は立ち上がりの端部が尖り気味となる。23は短頸壷。口縁端部は外反し，断面四角形。胎土は灰色。24は甕の頸部。頸部は胴部から急激な外反を見せる。頸部と胴部の接合部が確認できる。胎土は紫灰色で白色の石英粒を混入する。25は長頸壷頸部。胎土は青灰色。26は内面の接合部に大きな段差を有する。胎土は灰色。27は胴部に一条の沈線が施される。胎土は淡紫灰色。28･29は透かしを有する脚部の細片で，28は内面にヘラ削り調整が施される。胎土は灰色。29は淡褐色。30～32は底部片。30･32は高台が「ハ」の字形に開き，高台端部がやや跳ね上がる。胎土は灰色。31は角形高台を持ち，胎土は暗灰色。33は平底の底部片。底部に比べて胴部がかなり厚めとなり，内面は無調整。胎土は灰色。13は１層から,15･31･32は２層，17･26･29･30は３層，14･16･21･22･25は４層から出土。



第５図　出土遺物①

朝鮮製無釉陶器（第６図34～39）

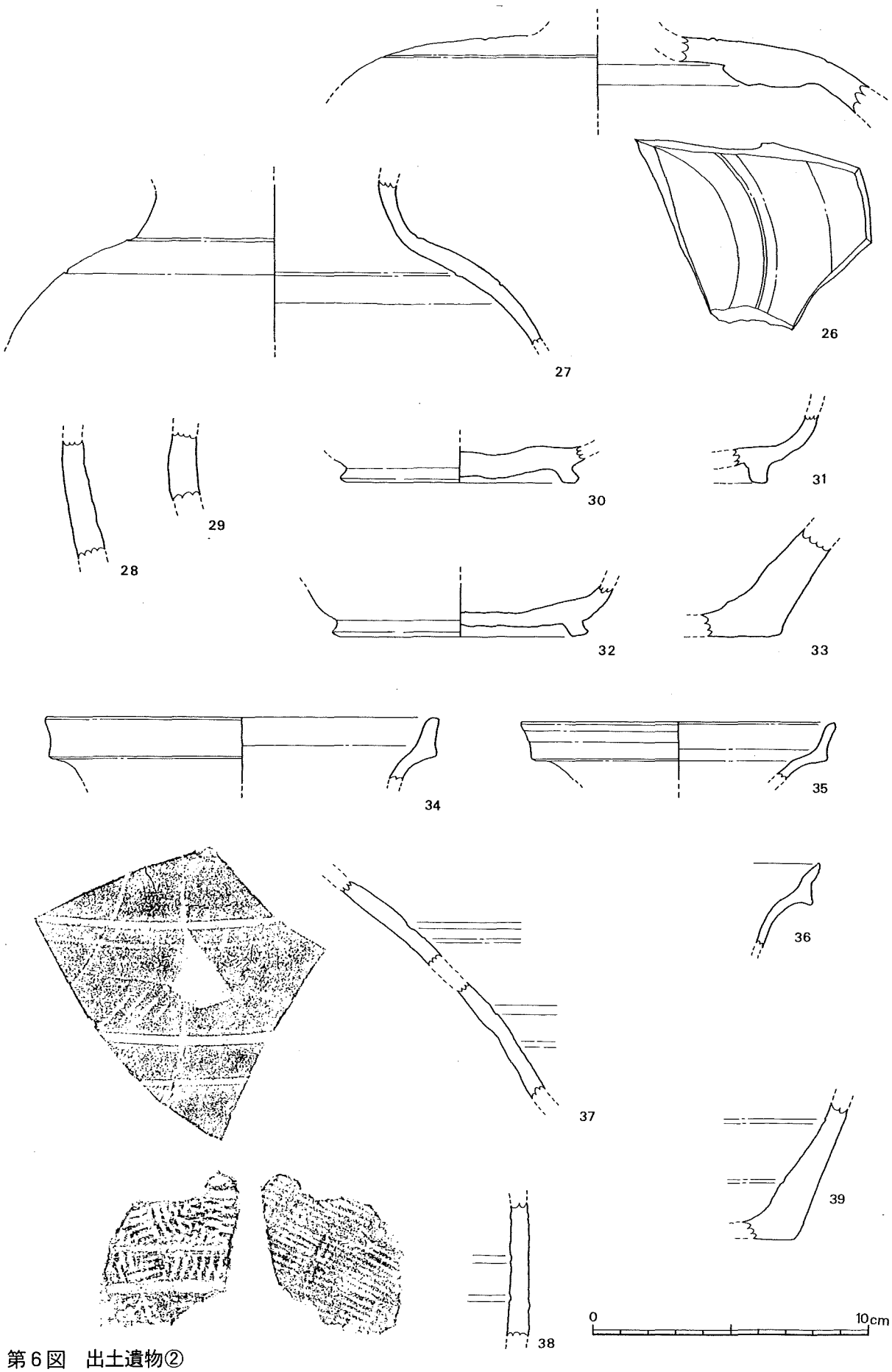
34～36は壷口縁部。二重口縁を持ち，34・35は端部を丸く納める。34は内外面横ナデ調整で外面に自然釉が掛かり，やや器肉が厚め。陶質土器の可能性もある。胎土は小豆色，外面は黒色。35・36は胎土は暗紫灰色，内外面横ナデ調整。37は内面に指圧痕が残り，外面には沈線が施される。内外面は灰色。胎土は暗紫灰色。38は内外面に叩き目文が残り，内面は叩き目の上に沈線が重なる。胎土は暗灰色。39は底部。内外面横ナデ調整，胎土は小豆色。36は４層から出土。

越州窯系青磁（第７図40・42～45）

全て碗底部片。４０はⅠ—1類。蛇の目高台を持つ。黄緑色の釉で底部外面を除いて施釉されるが部分的に剥げ貫入が入る。底部外面は灰赤色に発色する。42はⅡ—２類。釉は茶褐色で内面に施釉される。胎土は体部が暗灰色,底部は暗橙色。43は円盤状の高台で,釉は淡い茶黄色で内面に施釉。内面体部下位と高台外周部に目跡が残る。胎土は黄灰色。44は内面見込みに目跡が残る。釉は灰色で，内面と体部外面中程まで施釉される。胎土はやや黄色みがかった灰色。外底内部はヘラ削り調整を行う。45はⅠ—2類。灰オリーブ色の釉が畳付を除いて全面施釉され,貫入が入る。胎土は灰黄色。内面見込みに目跡が残る。

北宋後半代の白磁（第７図47～64）

52～54・56・57以外は碗。記載のないものはⅣ類。50は１層，47・53・60は２層，48は３層，51・61・64は４層から出土。47はⅡ類。口縁部に小さめの玉縁を持ち，玉縁の下に段を持つ。釉は黄白色で貫入が入る。胎土は白色。48～50は玉縁を持つ口縁部。いずれも釉，胎土とも灰白色で，48は玉縁と玉縁の下に釉溜りがあり，厚めに施釉される。51はⅤ類。口縁部を外反させ，体部は丸みを持つ。胎土は白色で黒い細粒を含み，白色の釉をかける。52は体部から口縁部まで直線的にのび，体部内面中位に一条の沈線を施す。半透明の釉で体部外面中位より下は施釉されない。胎土は灰色。Ⅴ類か。53は体部はやや丸みを持ち，内面に沈線を施す。Ⅴ類か。54はⅣ—１類の皿。体部は丸みを持ち，口縁部で外反する。内面に段を有する。釉は灰白色で厚めに施釉され，黒い細粒が入った灰白色の胎土を呈する。55はⅤ—４ｂ類。体部内面に櫛で施文し，内面見込みに沈線の段を有する。釉は灰白色で高台外周までかけられ，胎土は黒い細粒の入った灰白色。56は皿。体部内面に段を有し，淡い緑白色の釉で外底部は施釉されず，黄茶色に発色する。胎土は白色。Ⅴ類か。57はⅥ類の皿。釉は黄白色で内面に施釉され，貫入が入る。胎土は白色。Ⅵ類。58は内面見込みに段を有する。釉は灰白色で高台部まで施釉される。胎土は灰白色。Ⅵ類か。59は高台が歪み，高台下半に半周ほど段が付く。内面見込みに段を有する。胎土，釉ともに灰黄色で灰色が強い。外面は体部下半まで施釉。60・64は黒い細粒の混じった白色の胎土で。釉は60が灰白色，64は白色。現存品は見込みの段付近で打ち欠きされている。61は内面は見込みに，外面は体部と高台の境に段を持つ。釉は白色で外面体部下半まで施釉され，胎土は灰白色。62は内面見込みに沈線の段を持ち，削り出しの跡が渦巻状に残る。釉，胎土とも黄色みが強い黄白色で内面は貫入が入る。63は灰白色の釉で体部外面下方まで施釉される。胎土は黒い細粒が混じった灰白色。見込みの段付近で打ち欠きされる。



第6図　出土遺物②

青白磁（第７図65）

65は青白磁の合子の身で，菊座状の側面を持ち，底部と蓋受けの部分は露胎となる。２層から出土。

同安窯系青磁（第７図66）

66は碗口縁部。体部外面にヘラ状施文具による片彫りの沈線を施し，口縁部内面は横方向に一条の沈線が入る。飴色ガラス質の釉がかかり貫入が入る。４層から出土。

不明陶磁器（第７図67）

67は近世のものか。１層から出土。

龍泉窯系青磁（第７図68～70）

68・69は碗Ⅳ類。68は明緑色の釉で高台内面を除いて施釉される。胎土は灰白色。２層から出土。69は緑灰色の釉で体部と高台の境まで施釉される。胎土は灰色が強い灰白色。３層から出土。70は皿Ⅰ―１ｂ類。内面見込みにヘラによる花文がかすかに残る。釉はややくすんだ緑色で，貫入が入る。１層から出土。

明染付（第７図71）

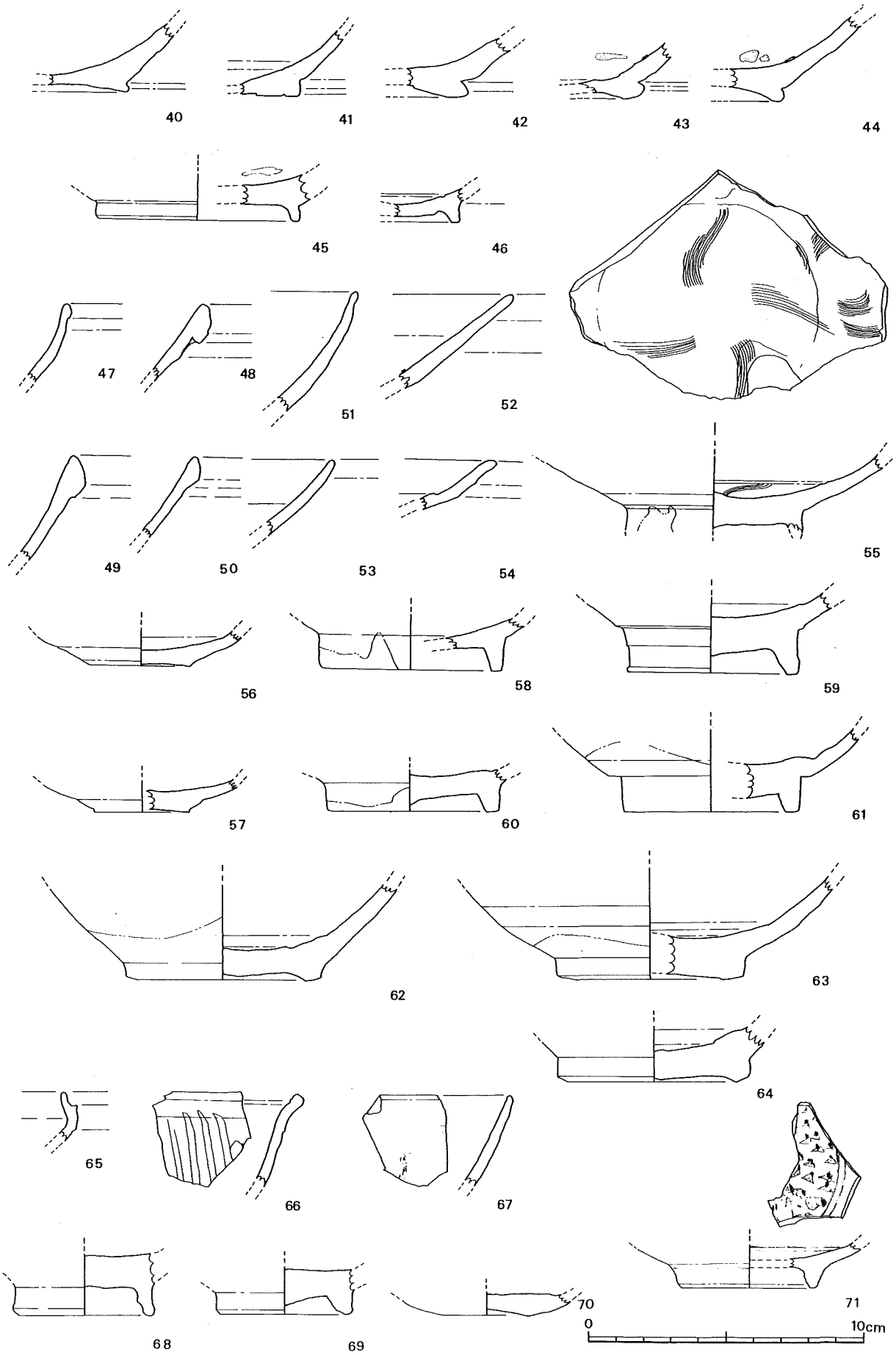
71は畳付以外に施釉され，内面に梵字文を施す。２層から出土。

高麗青磁（第８図72～80，第９図81）

72は体部で丸みを持ち，口縁部で外反する。釉は暗緑褐色で73より発色が良い。胎土は灰黄色。73は体部は直線的で，口縁部で外反する。釉は暗緑褐色，胎土は暗灰色。74・75は底部片。いずれも緑褐色の釉で，内面見込みと畳付に目跡が残る。74は内面見込みに段を持つ。畳付を除いて施釉され，内面に貫入が入る，外面は緑灰色の発色をなす。75は内面見込みに砂粒が見られ，高台内に窯印が残る。76は象嵌青磁唐草紋鉢である。淡緑色の釉下に白土と外面の蓮弁文の一部に黒土を施す。内面の文様は内に一本，外に二本の圏線の間に蓮弁文，その外に唐草文。外面は圏線，蓮弁文は内面と同様の配置で，その外に菊唐草文が施される。77は碗Ⅰ―２類。体部は直線的に立ち上がり，釉は青緑色で厚めに施釉される。畳付には施釉されず赤褐色に発色し，目跡が残る。胎土は灰色。78は比較的高い高台で，内面見込みと畳付に目跡が残る。釉は緑黄色で全面施釉。胎土は灰黄色。79・81は表面調整が粗雑で凹凸が確認される。内面見込みと畳付に目跡が残る。釉は畳付を除いて全面施釉され，79は黄土色，81は暗緑灰色。胎土は79が黄灰色，81は暗灰白色。80は内面見込みと高台内に削り出し跡が渦巻状の隆線となって残り，内面見込みと畳付に目跡が残る。淡緑色の釉が畳付を除いて全面施釉される。胎土は灰色。72・77・80・81は２層から，76は４層から出土。

朝鮮陶器（第９図82～84）

82・83は内面見込みと畳付に目跡が残る。82は内面見込みの中心部を削り残し盛り上がる。黄白色の半透明の釉が，畳付を除いて全面に施釉され，高台内はやや青みがかった発色。胎土は黄橙色。83は内面見込みと高台内に渦巻状のヘラ削り跡が残る。暗緑褐色の釉が全面施釉され，胎土は暗灰褐色で砂粒を含む。84は内面見込みに目跡が残り，高台内面外周部に段を持たせる。発色の悪い黄灰色の釉で高台畳付以内は施釉されない。胎土は暗灰色。


40
41
42
43
44
45
46
47
48
51
52
49
50
53
54
55
56
58
59
57
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
0
10cm

第７図　出土遺物③

李朝白磁（第９図 85～91）

全て碗底部片。85は白色の釉で全面施釉されるが,内面見込みの段より内は釉の上に土を塗り重ねる。胎土は白色で黒い細粒を含む。86･88･89は高台内中心部を削り残し盛り上がり，灰白色の胎土を呈する。86は内面見込みと畳付に,88･89は内面見込みに目跡が残る。釉は青みがかった白色で，外面は高台付近まで施釉される。86・88は貫入が入る。87は内面見込みに目跡，沈線が見られる。半透明の青灰色の釉で外面は高台付近まで施釉され，貫入が入る。胎土は灰白色。90は青灰色の釉で外面は高台外周まで施釉される。胎土は灰白色。91は高台畳付部が欠失している。釉は白色で全面施釉され，胎土は灰白色。88は４層から出土。

石製品 （第９図 92）

92は滑石製石鍋で復元口径は17.2cm。石鍋としては小型で，口縁部が内湾し胴部がやや膨らむ。鍔を持たないタイプ。外面はススの付着が著しい。外面の鑿痕は横方向に見られ，内面はよく研磨されている。直径0.8cmの穴が開けられており，何らかの把手を付けて使われていたと思われる。

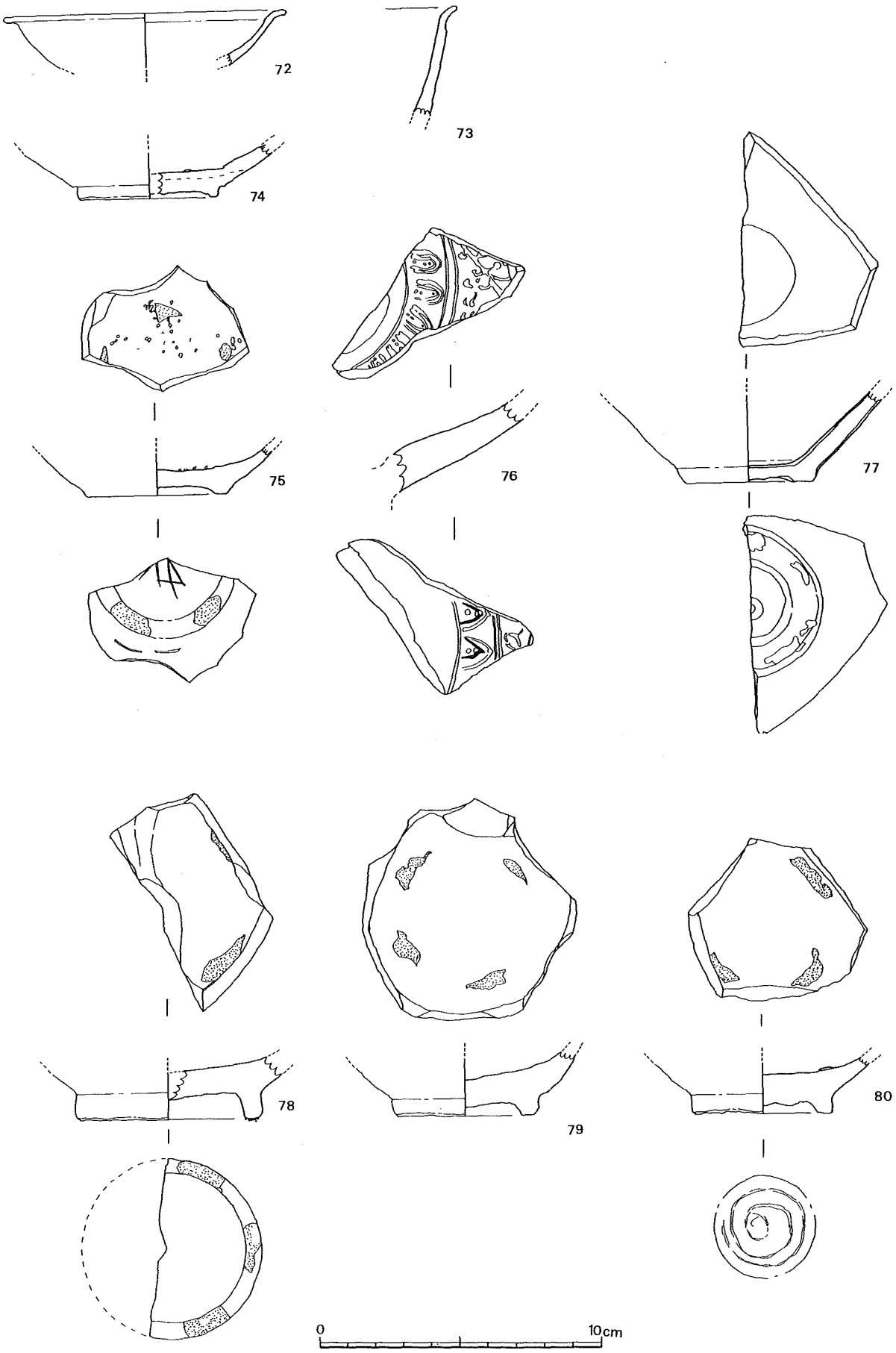
小結

- **土師器**　６世紀以降のものと思われる。（柳田1991）
- **須恵器**　６世紀から８世紀の坏蓋。６世紀末から７世紀初頭の坏身。（山本1992）
- **北宋後半代の白磁**　11世紀後半から12世紀前半（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類)。12世紀中頃から12世紀後半（Ⅴ―4b類)。（横田・森田1978）
- **越州窯系青磁**　８世紀末から10世紀中頃（Ⅰ・Ⅱ類)。（横田・森田1978）
- **龍泉窯系青磁**　13世紀中頃から14世紀初頭（Ⅲ類)。14世紀初頭から15世紀前半（Ⅳ類)。（横田・森田1978）
- **同安窯系青磁**　12世紀中頃から12世紀後半（Ⅲ類)。（横田・森田1978）
- **高麗青磁**　76は14世紀後半。77は10世紀から11世紀。（崔・長谷部1978）
- **石鍋**　10世紀末から11世紀のものと思われる。（木戸1995）

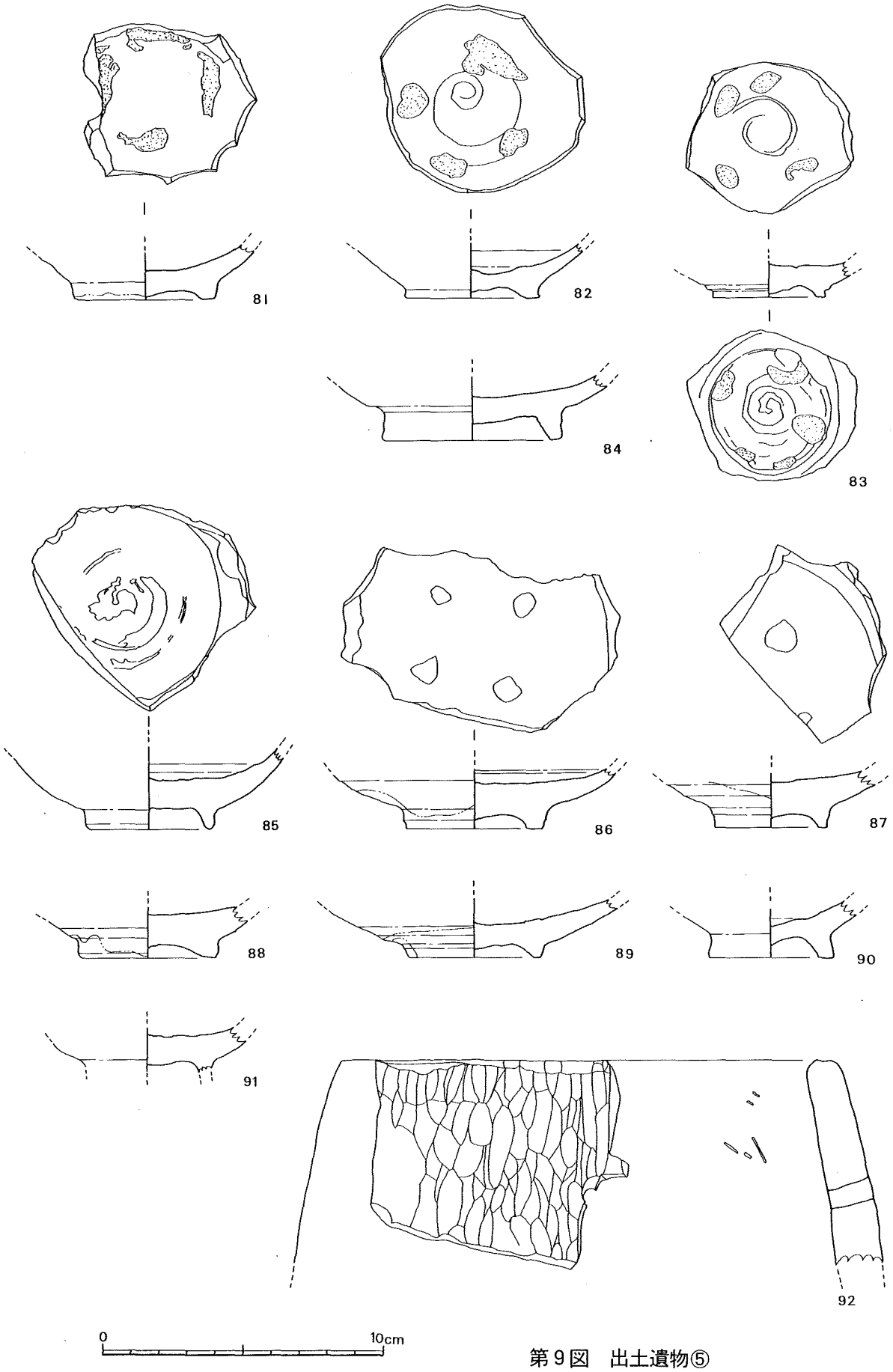
この他に，５世紀頃（陶質土器）から16世紀頃（李朝白磁）までの遺物が連綿と出土し，県内でも希有な緑釉陶器や越州窯系青磁が多く見られることは，特筆すべき点である。

参考文献

小田富士雄　1990　「対馬・北部九州発見の新羅土器」『九州考古学研究　文化交渉編』
木戸雅寿　1995　「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
崔淳雨・長谷部楽爾　1978　『世界陶磁全集』18高麗　小学館
高橋照彦　1995　「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
舟山良一　1993　「牛頸窯跡群と大宰府」『古代の土器研究　律令式土器様式の西・東２　須恵器』
柳田康雄　1991　「土師器の編年　２九州」『古墳時代の研究』６土師器と須恵器　雄山閣
山本信夫　1992　「北部九州の７～９世紀中頃の土器」『古代の土器研究　律令土器形式の西・東』
山本信夫　1983　『大宰府条坊跡Ⅱ』　太宰府市教育委員会
山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４



第8図　出土遺物④



第９図　出土遺物⑤

V　まとめ

対馬は、壱岐と共に古来より大陸と島国日本との間の玄界灘に飛び石的に存在し、中継地的な役割を果たしてきた。豆酘はその対馬の中でも最南端の拠点的集落として、重要な役割を担ってきたことは、Ⅱ章の地理的歴史的環境のところでもみたとおりである。また、前章でみたように、考古学的な遺物もそれに符合するように、やはり、5世紀から古代・中世の遺物が出土している。

本遺跡の性格については、Ⅱ章でみたが、馬乗石の遺跡名から示すように、この地が神田川の沖積地に広がる神域の、入口部分にあたるため何らかの祭祀的な性格も考えられる。しかし、遺構・遺物的に何らかの痕跡を確認したわけではない。

現地指導していただいた永留久恵先生によると、この場所が川に近く、また、堰がありこの下の水田の取水口になっていることから、田植えに備えて水田に水を引くときに‘牛の祭り’を行った可能性もあること、また、この地は元来個人の所有地ではなかった所で、昔からの祭祀場所は個人の所有にはならなかったとのご教示を得た。トレンチ断面でも、3層の灰色礫層の上に灰黄色の土層の堆積があることから、単なる邪魔な石の集積場とは断定しがたいものがある。結論的には、何らかの祭祀的な性格をもった遺跡の可能性があるというところではないだろうか。

図　　版

遺 跡 遠 景（北から）

発掘前の様子（東から）

図版 2

遺跡近景（東から）

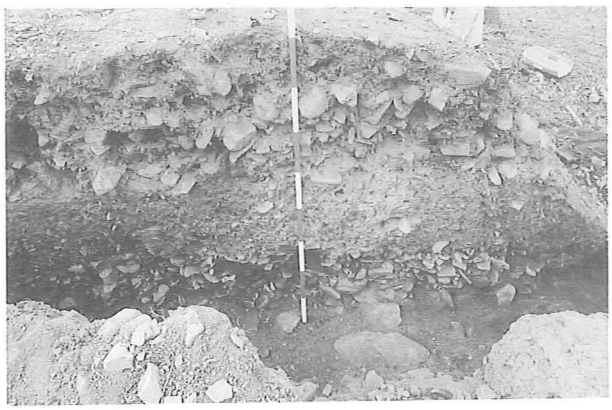
伐開のようす

現存の馬乗石

発掘開始

1トレンチ

2トレンチ

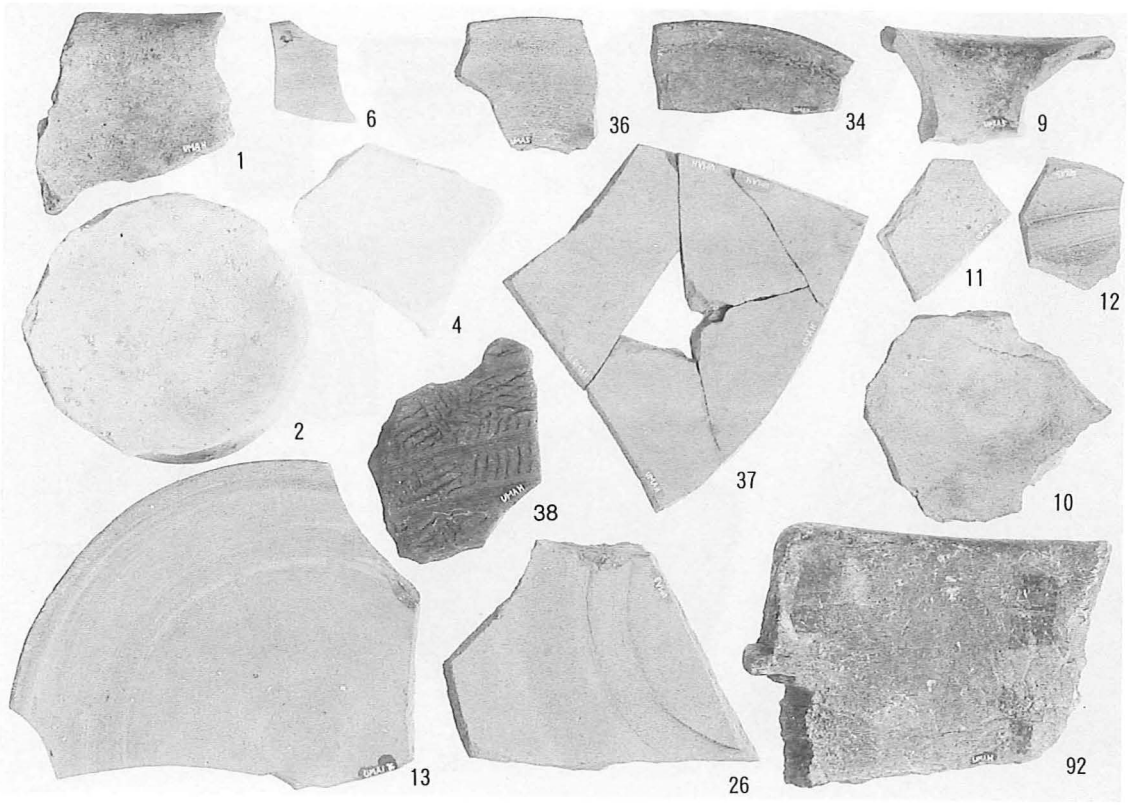


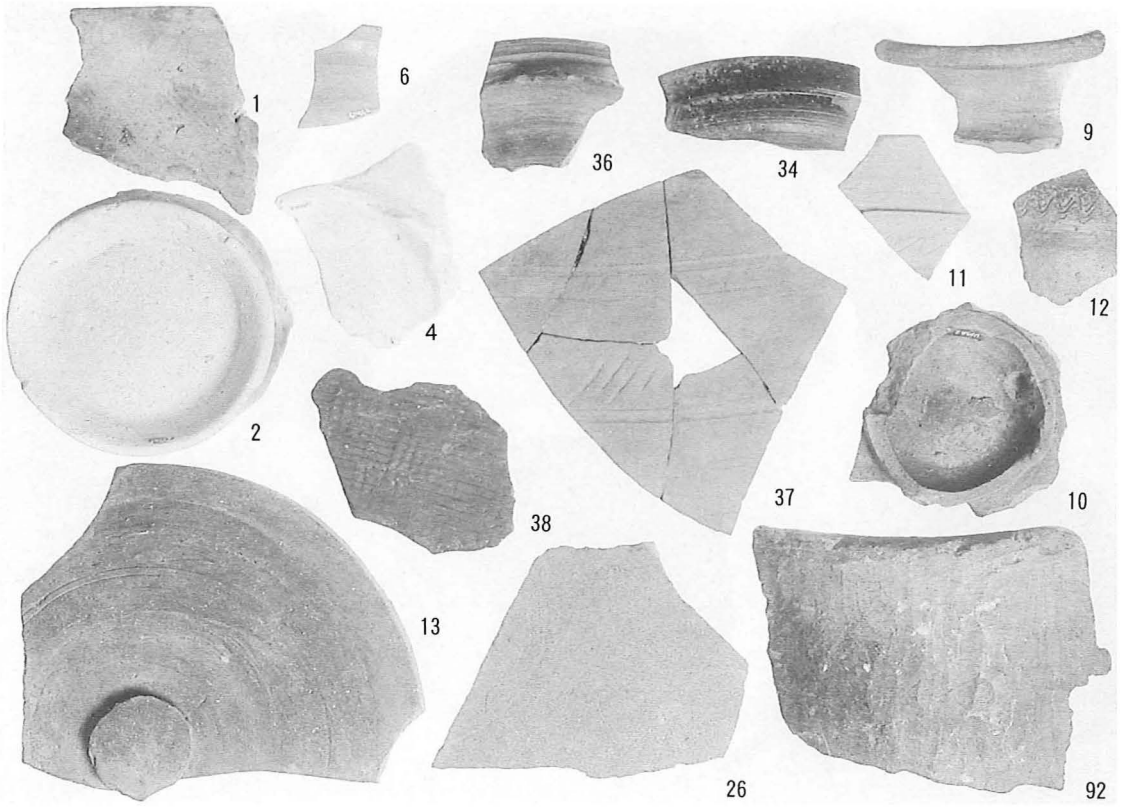
3トレンチ

6トレンチ

調　査　状　況

内面


1
6
36
34
9
2
4
11
12
37
38
10
13
26
92

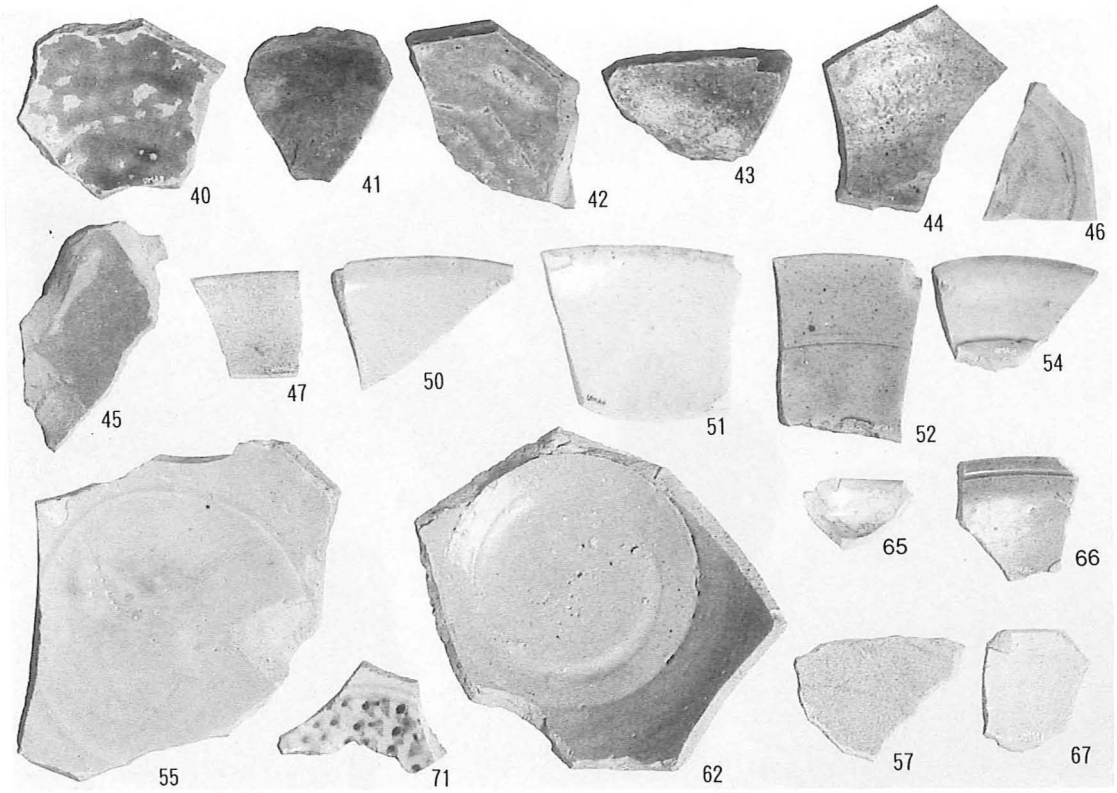

1
6
36
34
9
2
4
11
12
37
38
10
13
26
92

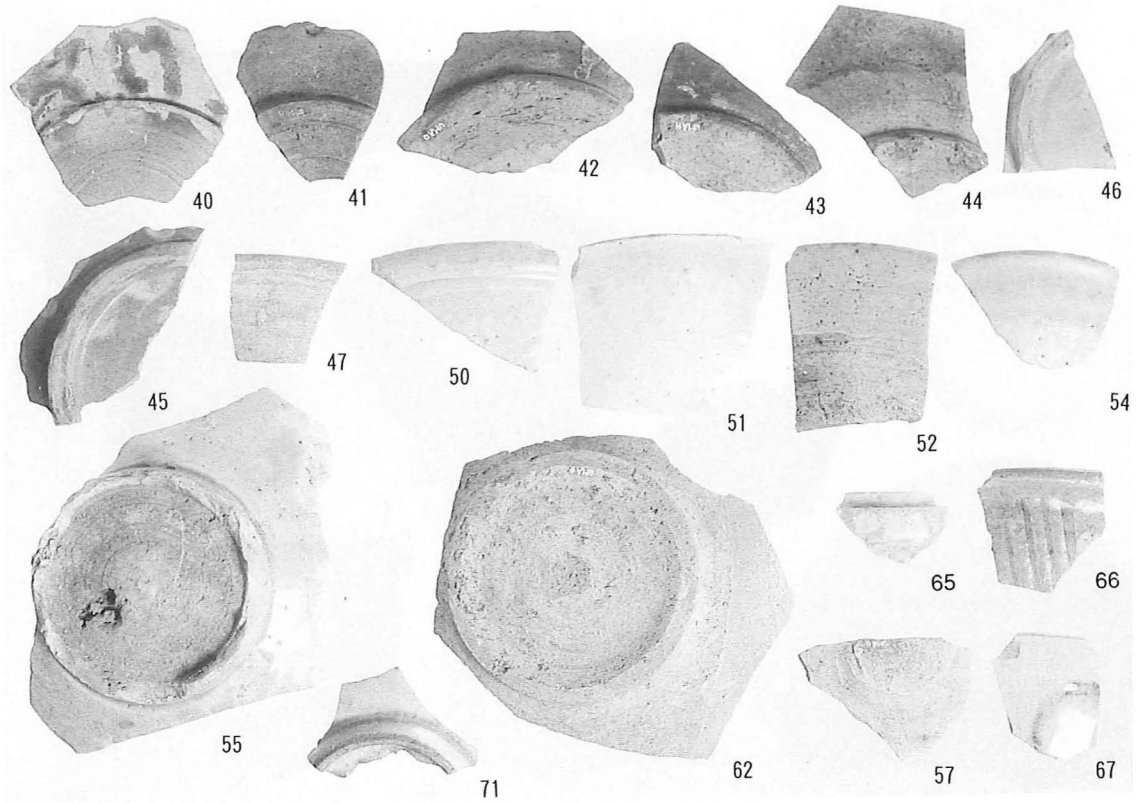
外面

出土遺物①

図版 4

内面

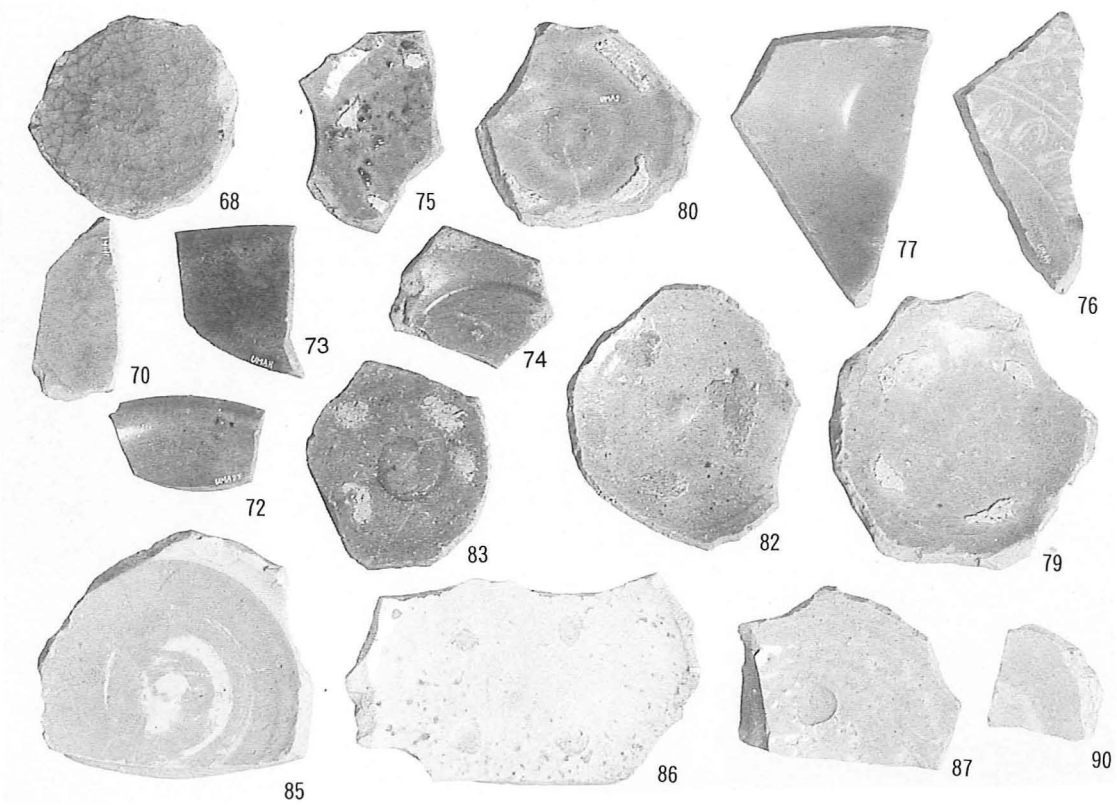


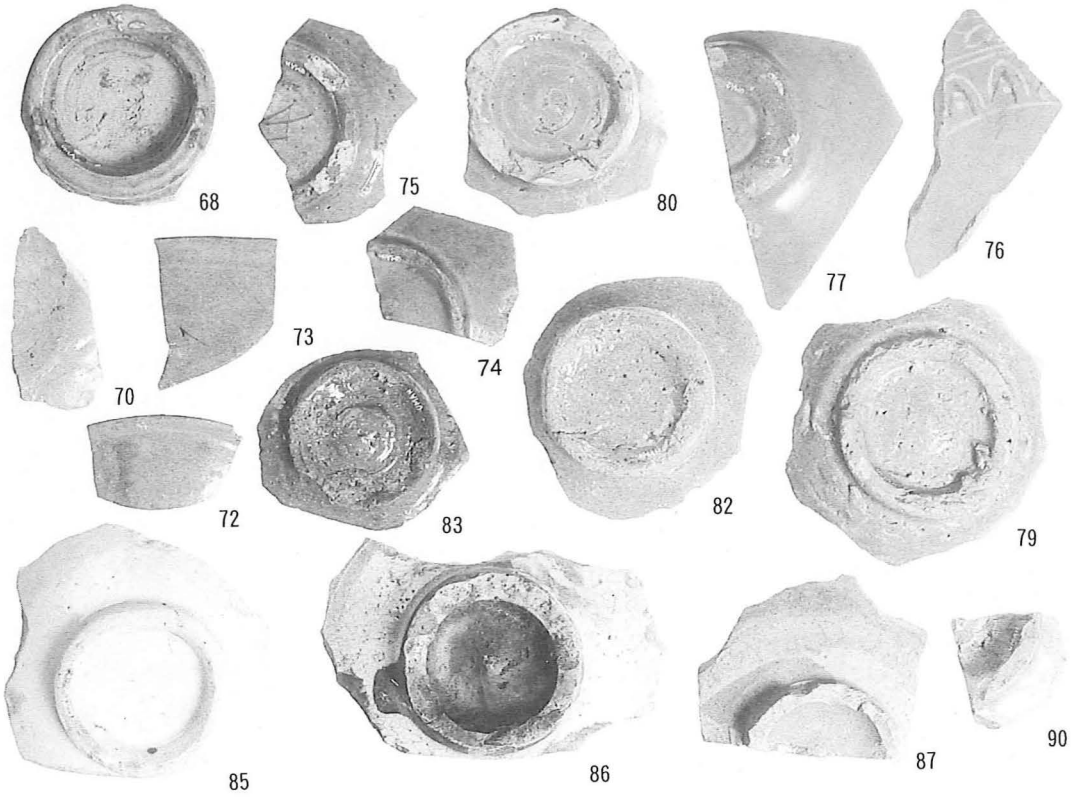


外面

出土遺物②

内面


68
75
80
77
76
70
73
74
72
83
82
79
85
86
87
90


68
75
80
77
76
70
73
74
72
83
82
79
85
86
87
90

外面

出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	うまのりいしいせき
書名	馬乗石遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第149集
編著者名	村川逸朗・宇土靖之
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町２－13　　ＴＥＬ(095)824-1111
発行年月日	西暦　1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬乗石遺跡	長崎県下県郡 厳原町豆酘					19970929 ～ 19971017	46	農道新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬乗石遺跡	包蔵地	古墳・古代・中世		土師器，須恵器，古代土器，越州窯，青磁，輸入陶磁器（青磁，白磁）	

長崎県文化財調査報告書　第149集

馬　乗　石　遺　跡

平成10年３月31日

発　　行　　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２－13
印　　刷　　株式会社　クイックプリント
長崎市樺島町８－12